

て居る。従つて斯る農法の存在する地域に於ては、放浪遊牧的なホツテントットの居住する地域等に較べて、遙に大なる定着性が強制されるわけであるから、聚落もよ、固着的なものとなり、一方に於ては原始的な商工業の萌芽が胚胎するに至るのである。Mend はアルゼリア南部からニヂェル河流域に及ぶ中部サハラ沙漠の地形學的研究を發表して居るが、サハラ沙漠の特殊な階段狀地形と大ワヂは、現在の氣候ではなく、以前のより濕潤な氣候の下に成生したものと看做して居る。

最後に Lant und Volk an der Saar を紹介して置く。これは Reinhard と K. Voppel が編輯した小冊子で、表題からでも判る様に、本年一月に人民投票の行はれたザールのための大衆讀本とも稱すべきものであつて内容が通俗的なばかりでなく、ザールは獨逸へのヒットラーの宣傳が我々には目ざわりであるが、我國の類似の書籍が徒に概念的な言葉を羅列して居るのと異り、地誌博物館の圖表や模型、或は寫真や地圖を巧に使用して、ザールの土地と住民の關係を、小冊子ながら充分理解せ

しめる編輯の方法には多分に見ならふべき點があるであらう。(Ferdinand Hirt in Breslau u. Berlin) (以上 織田武雄)

### ○新義西洋史 原 隨 園 著

普遍史はかならず普遍的でなければならぬ、しかし、「普遍的なること」は必ずしも詳悉的なることを要しない。例へばランケの Epochen は決して詳悉的でない、にも不拘吾々はかくの如く普遍的なる普遍史を他に有つてゐるだらうか。原博士の近著「新義西洋史」も亦此のやうな意味に於ける普遍史の一であると思はれる。

「あらゆる部分は、その不完全さを免れんがために、全體と合致したがつてゐる」といふレオナルドの意味深き言葉を巻頭に掲げたのは、「全體への考慮即ち普遍の追求を第一義とする著者自らの心境の告白なのであらう。よき部分を寄せ集めても必ずしもよき全體を構成しないことは、美しき色を寄せ集めても卓れた繪畫とはならないのと一般である。部分の前に全體がなければならぬ。普遍史の著者は常に體系の所有者でなければならぬ。

である。

簡略と疎略とは似て非なるものである。複雑を超えた單純含蓄ある單純は名人の至藝の如く一朝一夕に到達し得るのではない。百餘頁の世界史の草案のためにはランケ終生の粉骨の努力を要したのである。本書の著者の言ふ「多方面的單純」もまたかくの如き複雑を克復した單純を指すものであり、限りなき多様の結晶學であると思はれる。

併し乍ら複雑なるものゝ單純化は飛躍を含み象徴的となる、尠なく言ふことによつて多くが暗示されなければならぬ。事實が語られないで意味が語られる。本書の叙述が抽象的に傾くのはこの故である。ともあれ三百餘頁の小冊の裡に世界史の景觀を纏められた著者の手際に第一に敬意を表さなければならぬと思ふ。

本書の構成が、例へば古代・中世・近代のやうな習慣的便宜的な三分法ドライ・タイルンクを採られなかつたことには著者の深き心構へが窺はれる。便宜主義の法式を棄て年代學的排序から離れ、時代の内容、意味の關聯、發展の眞實に即した

著者自身の確信あるシステムを *austreten* せられた點には尠からぬ苦心の存したことゝ思はれるのである。

かくの如き排序法は一と傾リース氏などによつて提唱されてゐた同時的把握法 (*Synchronistische Auffassung*) に對する無言のプロテストであるとも受取られなくはない例へば「カール大帝の世界」はローマの世界統治の項に於いて扱はれ、希臘文化の流入即ちローマのヘレニズム化やキリスト教などは却つてその後章に説かれてゐる。

在來の年代的排序から謂へば古代と中世との錯雜があることになる。ベルギーの獨立は七月革命から遊離して、半世紀を隔てたドイツ統一やイタリヤ統一と並叙せられる。茲にも從來の序法に對する相當に思ひ切つた反逆が見られる。然し著者は七月革命や二月革命を以つてフランス内政問題とせず、又單なる自由反動の政治的風潮の波紋としないで、産業革命と共にブルジョワジの進出を標識するものと考へる。それに對してベルギー獨立やギリシヤ獨立は、その契機は孰れにもせよ、國家主義運動の進展に於ける一事實であると解する一個の立場を有

つてゐらるゝかの如く思はれる。

右の例によつても知られるやうに、本書がクロノロジカルな齟齬を可成に含んでゐるに關はらず、讀過の際に甚だしき奇異の意を刺戟しないで、事象の關聯の整合をさへ感じられるのは何故であらうか。それは本書のシテムに恐らく紙敷の制限から餘儀なくされた多少の無理はあつても、その排序は決して *arbitrary* な獨斷に基くものでなく、眞實と合理性とを含んでゐるが故に他ならない。歴史の時間はいふまでもなく前後の措定である。前後の指定は然し同時に意味の關聯である。ジムメルの言つてゐるやうに、歴史の時は漠然とした時一般と言ふ如きもの、内容なきアブソルートな時でない。限定せられた時、意味を有つた時でなければならぬ。今日の私の思惟は昨日の私の心境に關係し、昨日私が食事した事實に關係しない。時は曆の日附ではないのである。

このやうに謂へば本書の *method* が序列の型式に存するが如く聞え、却つてその眞價を冒瀆するかも知れない。本書は古き酒を盛つた新しき革囊では決してないが故で

ある。

例へばギリシヤについても、是れまで稍々説き古されてゐるベルシヤ戰役中心の政治的事實には、著者は日頃の蘊蓄にかゝはらず殆んど詳説を避け、却つてそれ以前のギリシヤ社會成立過程に多大の頁が割かれてゐる。在來の知識の缺陷を補ふと言ふべきであらう。世に流布する類書に共通な缺陷と思はれるのは、十九世紀に至ると必ず敘述が散漫或は一面的となることである。國際關係を中心とする外交史に終止するか、或は多面的生活の散漫な羅列に陥り、これまでの普通のシステムに破綻を生ずるが常である。西歐學界の相當に評價すべき著書でも此の缺陷あるを免れない。本書の著者も亦夙に此の點を痛切に感ぜられるが故であらうか、思想、文學、美術の如き精神的傾向と政治、社會の動向との遊離を防ぐことに餘程苦心を拂はれたことが窺はれる。

しかし評者の最も敬服するところは、卷頭約四十頁を占める先史時代の記述である。古代東方諸國の興亡に筆を起すことは西洋史敘述の殆んど公式のやうになつてゐる

る。たとひそれ以前に溯る場合があつても全く通り一遍のものに過ぎない。蓋し考古學的研究の進歩に一應の關心と理論とを有つてゐても、それを綜合して世界史のシステムに對應するだけの秩序を與へることは至難の業であらうと想像せられる。本書第一篇の如きは、此の點に於いて何人も一讀すべきものである。兩河地方文明、エジプト文明、ミノア、ミケナイ文化などは、右の文化源流の交錯圈、先史世界史の關聯の秩序の裡に正確に位置づけられる。これまでローマ史の部分で説かれてゐたエトルスキ文化はハルスタット期の中に新しき場所を與へられ、先史文化の解明に民俗學的考察の用ゐられてゐることも啓發さるゝ點が多い。是等は古代史家として吾が學界に重きをなす本著者にして始めて能くなし得るところとなしければならぬ。

中世に對して充分なるプロポーシヨンの與へられてゐないこと、サラセン、ビザンツが視野の外に置かれてゐること、是等に就いて不滿を擧げられぬこともないであらう。然し著者の如き人が是等を理由なしにオミットし

或はネグレクトする筈はないのである。先に述べた如く本書は詳悉的ならざる普通史である。本書は著者自身の有つ世界史の體系の見取圖であるが故に貴いのである。ブルックハルトも言つてゐるやうに、大なる刈入者にも落穂がある。充實せる除外は空處なる完全にまさる。總てあることは屢々何物でもないことに等しい。あらゆるものを約束して何物も與へない粗雑な著書も行はれる讀書界に、本書の如きは眞に精彩を放つものと言つてよいであらう。(共立社發行、定價貳圓八拾錢)(鈴木成高)

○ The Cambridge Ancient History

Vol. X. The Augustan Empire 44 B. C.—  
A. D. 70

本卷は前卷 The Roman Republic 133-44 B. C. の後をうけて昨年出版された。本卷はカエサルの横死よりヴェスパシアヌス即位に至る期間を取扱つてをり、ローマ史に於ける最も重大なる轉期であり、世界史上より見ても極めて重要な時期である。Cook, Adcock, Charleswo-